

## コロナ禍における学生の生活と人間関係に関する研究

小 熊 信

### 目 次

1. はじめに
2. 学生の生活、人間関係をめぐる諸相
3. コロナ禍のなかでの学生生活
4. 本稿で取り上げる調査
5. 調査結果
6. ま と め
7. おわりに

### 1. はじめに

2020年1月に確認された新型コロナウイルス(COVID-19)は、瞬く間に拡大し、世界的なパンデミックを引き起こした。それまでの生活様式は見直しを迫られることになり、私たちは感染防止のために非接触の生活を求められることになった。感染初期から2年あまりが経過し、現在は感染の勢いは落ち着きつつある。しかし、私たちの生活様式はコロナ以前とは違ったものになっている。

筆者は労働の場を主たる調査・研究のフィールドとしている。テレワークの活用は多くの職場で定着することになった。テレワークはコロナ前からその必要性は認識され、また、デジタル技術の発展を背景に導入のための環境も整っていた。しかし、導入は緩慢にしか進んでいなかった。それが、コロナ禍を境にして急速に浸透することになった。コロナ禍が変化をもたらしたというよりも、コロナ禍が変化をうながす触媒となった。

同様のことは大学教育の場にもいえる。教育へ

のオンラインの活用はコロナ前にも既に実践されていたことであるが、一般的な教育のあり方とはなっていなかった。これがコロナ禍を触媒として、急速に取り入れが進むことになった。

労働の場、大学教育の場ともに、オンラインによるコミュニケーションの活用が進んだが、これが従来の対面の代替となり得ていたかは検討の余地がある。テレワーク、オンライン教育とともに、移動のための時間の節減は、私たちの生活を効率的なものとした。しかし、これは労働の場、大学教育の場ともに、所定の時間(労働時間、授業時間)の終了と同時に、コミュニケーションが打ち切られるという効率性でもある。対面時における所定の時間の周囲にある時間は無意味なものだったのだろうか。むしろ所定の時間に前提とされている目的に縛られず、立場の違い(労働の場であれば上司・部下、大学教育の場であれば教員・学生)がもつ拘束性が緩和された自由度の高い関係形成、コミュニケーションの場であったのではないだろうか。

現在、大学教育の場での制約は大幅に緩和され、対面が主体の授業形態となってきた。しかし、筆者は3・4年生が受講する社会学演習(ゼミナール)を担当しているが、学生と授業時間外で対面での打ち合わせを設定しようとする際、学生から「対面で会う必要がありますか」という問いかけを受けることがある。緊急避難的な措置であったとはいえ、大学はオンラインが対面を代替しうるものとして取り扱ってきた。それゆえ学生

の問いかけも真っ当なものである。この2020年からのコロナ禍の2年間、オンラインでの学生生活を強いられた学生にとって大学という場のもつ意味合いが変わってしまったのではないだろうか。私たちには対面で会うことの必要性を説明することが求められている。

筆者が担当する社会学演習（ゼミナール）では2021年10月に学生を対象に、コロナ禍での生活、人間関係をテーマとして取り上げたアンケート調査を実施している。コロナ禍のなかで学生の生活や人間関係はどのようなものであったのか。その特徴点を本稿では検討していく。

## 2. 学生の生活，人間関係をめぐる諸相

学生の生活，人間関係という領域では，コロナ以前にも多くの研究が積み重ねられてきた。はじめに学生の生活，人間関係はどのような特質をもつものとして検討されてきたか確認しておきたい。

### (1) 学生生活の重視点

学生の生活という点では全国大学生生活協同組合連合会が継続的に実施している「学生の消費生活に関する実態調査」に設けられた設問「大学生活の重点」はこれまでの学生生活の変容をわかりやすく示している（表1）。設問では大学生活のなかで第一としているものをたずねている。1990年と2020年とを比べると以下のような特徴点を

読み取ることができる。1990年に最も多かったものは「よき友を得たり豊かな人間関係を結ぶこと」（24.1％）であったが，これは2020年には18.0％となっている。これとは対照的な推移となっているのが「勉強や研究」で，1990年には20.3％であったものが，2020年には33.4％となっている。

長期的な推移をみると学生生活の重視点は“人間関係”から“勉強や研究”にシフトしている。コロナ禍においては，学生が抱える課題として，オンライン授業の実施により友達ができないこと，孤独に陥ることが指摘されてきた（『学生の孤立，大学が危機感』『朝日新聞』2021.9.27 朝刊）。学生の孤立という課題は決して軽視できるものではない。しかし，人間関係の重視度が低下してきたなかでコロナ禍が起きていたことも見据えておく必要がある。

### (2) 若者の人間関係をめぐる研究

学生，もしくは，学生を含む若者の人間関係をめぐる研究からは，学生は人間関係を求めつつも，人間関係自体を繊細なものと捉え，場合によっては悩みのもととなってきたことが指摘されている。土井は若者の人間関係について「現代の若者たちは，自分の対人レーダーがまちがいに作動しているかどうか，つねに確認しあいながら人間関係を営んでいる。周囲の人間と衝突することは，彼らにとってきわめて異常な事態であり，相

表1 大学生活の重点（全国大学生生活協同組合連合会「学生の消費生活に関する実態調査」）

(%)

	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
勉強や研究を第一においた生活	20.3	17.4	24.0	28.4	26.0	29.3	33.4
サークル・同好会の活動を第一においた生活	14.5	13.9	9.1	13.8	14.3	14.4	12.9
よき友を得たり豊かな人間関係を結ぶことを第一においた生活	24.1	24.3	19.2	17.1	13.0	11.9	18.0
特別に重点をおかず，ほどほどに組み合わせた生活	15.1	15.8	21.4	20.9	21.5	21.7	13.0

注) 2020年における比率の上位4項目を掲載。

出所) 全国大学生生活協同組合連合会「CAMPUS LIFE DATA 2021 第57回 学生の消費生活に関する実態調査報告書」(2020)より作成

手から反感を買わないようにつねに心がけることが、学校での日々を生き抜く知恵として強く要求されている。その様子は、大人たちの目には人間関係が希薄化していると映るかもしれないが、見方を変えれば、かつてよりはるかに高度で繊細な気くばりを伴った人間関係を営んでいるともいえる。」(土井 2008 : 16-17) とみている。土井によれば、若者の人間関係は希薄ではない、むしろ、きわめて繊細に扱っているから、大人たちには希薄化しているようにみえるだけ、ということになる。当事者である若者にとっての人間関係は取扱いに注意を要するものである。

このような学生の人間関係の繊細さについて、アンケートによる実証調査を通じて明らかにしたのが満野である。満野は「従来の現代的な友人関係の研究では、友人関係の希薄化に注目が集まりがちであったが、そればかりではなく、親密な付き合い方も従来通り、一般的な傾向であることが本研究でも確認された。」(満野 2015 : 130) とし、人間関係の希薄化論を否定している。そして注目すべきは「孤立因子は見出されなかったが、親密因子と関係悪化回避因子が抽出され、親密な付き合いと関係悪化を回避する付き合いが現代大学生に特徴的な友人との付き合い方であることが示された。」(同 136) と、親密さを求める意識と、関係悪化回避を求める意識とが並存するものとして学生の心情風景を映し出している。ただ、親密さと関係悪化回避を求める意識は同時に適用されるわけではない。「相手が友人か親友かで行われる気遣いが違っていた。(中略) 大学生には、大学の内外に多様な友人関係があるだろう。その多様な友人関係ごとに、親密な付き合いと、表面的な付き合いとを使い分けているということが、より実態に近い」(同 131) とみている。

もちろんこのような人間関係の使い分けは若者に限定されるものではない。石田は現代の人間関係について、「人間関係の維持・構築において、社会の役割に埋め込まれる部分が縮小し、諸個人

の選択と決定に委ねられる部分が拡大している。この『人間関係の選択化』は現代社会における孤立と密接に関連する。」(石田 2018 : 61) と述べている。若者、なかでも学生の人間関係は、選択の余地の大きい人間関係といえるだろう。しかし、選択が可能であるがゆえに孤立、孤独の問題も深刻化しやすい。また、自分自身が人間関係を選択しやすいということは、相手にとっても人間関係を選択しやすいということと同義である。土井がいうところの「繊細な気くばり」、満野がいうところの「気遣い」は、選択可能性の高い人間関係ゆえということもできる。

### (3) SNS と人間関係

コロナ禍においてはデジタル技術の活用拡大が社会、経済活動の継続を可能にしていた。人間関係の形成、維持においても、SNS などが果たしていた役割は小さくない。労働の場では、テレワークの実施にともなう困難としてコミュニケーションの難しさがあることが労働者を対象とした調査をもとに指摘されている。コロナ禍でのオンラインのコミュニケーションには制約がある、というのが一般的な見方であろう。しかし、オンラインでのコミュニケーションが抱える困難性とは実のところどのようなものなのだろうか。

再び、土井を取り上げるが、土井はネット・コミュニケーションの世界について「文字情報だけでのやりとりがまだ主流であり、しかも互いの匿名性を保ちやすいことから、身体性にとらわれない交流が行われているかのように思われがちである。しかし、実態はむしろ逆で、そこでは身体性を過度に強調したコミュニケーションが行われている」(土井 2008 : 148) と述べている。労働の場、もしくは、学生同士の人間関係においては「匿名性」の部分は当てはまらない。しかし、「身体性を過度に強調したコミュニケーション」が可能になる点是非匿名性の関係にも当てはまる。土井はメールの返信の仕方についても以下のように

考察している。「着信したメールに返事を出す場合でも、どの程度の時間をおいてレスを返すかによって、自分の気持ちを暗黙のうちに相手へ伝えられる。大切な相手にはただちにレスを返すが、内心うとましく思ってる相手にはある程度の時間をおいてからレスを返す。」(同 152) つまりオンラインによるコミュニケーションは、対面でないにもかかわらず、時間という身体的な感覚の共有をとまなうコミュニケーションである。そこでは自らの意図が伝わらないことが問題になるのではなく、自らの意図を超えて過剰に伝わることも、また、意図しない伝わり方をすることもある。「コミュニケーションが困難」のなかみとしては、コミュニケーションが伝達する情報量の少なさばかりであり、過剰さも課題となるのだ。そして、人間関係が繊細なものであれば、その取扱いはさらに注意を要するものになる。

コロナ禍では対面でのコミュニケーションが制約される一方で、オンラインでのコミュニケーションが求められることとなった。対面でのコミュニケーションが制約された状況下における携帯電話、携帯メールによるコミュニケーションの補完性について古谷・坂田が研究している。古谷・坂田は「あらゆるメディアを使用可能な近距離の友人や、関係期間の短い友人関係については、対面でのコミュニケーションの重要性が認められた」ことに加え「近距離友人関係や関係期間の長い遠距離友人関係の場合、限定的ではあるが、携帯メールでのコミュニケーションを行うことで、関係を維持できる可能性があることが示された。」(古谷・坂田 2006: 83) としている。どのような関係であっても、物理的には携帯メールなどオンラインのコミュニケーションの利用が可能であるものの、向き不向きがあるということである。また、コロナ禍における学生同士の人間関係に当てはめるとすれば、いろいろな地域から通学している学生同士の関係は近距離でもないし、また、関係期間の長い遠距離でもない。オンライン

のコミュニケーションを通じた関係形成や維持には難しさがあったといえるだろう。

対面でのコミュニケーションが制約されたなかで、オンラインでのコミュニケーションが維持できる関係とはどのようなものであろうか。土井はネットのコミュニケーションが活用されている場として地元のつながりをあげている。つまり、「近年の若者たちのあいだでは、地元から遠く離れた高校や大学に進学しても、あるいは就職したあとでも小学校や中学校までの地元のつながりがそのまま保たれる傾向にある。これまで指摘してきたように、生得的な属性への思い入れが強くなっているからである。そして、原理的には全世界へと開かれているネット上を飛び交うケータイ・メールも、皮肉なことに、この閉じられた地元のつながりの維持を可能にする手段として役立っている。」(土井 2008: 156) というのである。

古屋・坂田、そして、土井の考察は、この2年の間のコロナ禍における学生の人間関係を検討するうえで示唆的なものである。対面のコミュニケーションが制約され、オンラインのコミュニケーションの役割が高まるなかでは、“近距離友人関係や関係期間の長い遠距離友人関係”，つまり，“地元のつながり”が人間関係のなかで存在感をもつようになる。これは学生の生活・人間関係のなかにおける大学という場の位置づけのさらなる後退を意味する。

### 3. コロナ禍のなかでの学生生活

コロナ禍は人類にとっての惨禍であり、それゆえ、新聞、テレビ等の報道では、その悲惨な側面が取り上げられやすい。コロナ禍での学生生活を取り上げた新聞報道をみていくと以下のような見出しが目につく。

「バイト大学生『収入減』6割」(『読売新聞』2020.4.22 朝刊)

「学生困窮 バイト激減、実家も頼れず『支援ない』と退学か休学」(『朝日新聞』2020.4.24 朝刊)

「(コロナと学び) 中退増が心配, カギは友人作り」(『朝日新聞』2020.6.16 朝刊)  
 「[社説] 大学生の困窮 中退防ぐ支援を充実させたい」(『読売新聞』2021.4.23 朝刊)  
 「『コロナ影響で休学』昨年同期比 1.65 倍 文科省『通学減り孤立』」(『朝日新聞』2021.11.21 朝刊)  
 「学生時代に力を入れたことは? 就活生『エピソードがない』 コロナ第 1 波の春に入学」(『朝日新聞』2022.6.9 朝刊)  
 「コロナで大学中退 35% 増 交流少なく, 学ぶ意欲低下か 文科省 昨年度調査」(『読売新聞』2022.6.16 朝刊)

これらの記事には, コロナ禍により生活の支えとなっていたアルバイトがなくなり困窮し, オンライン授業によって他の学生と会うこともなく孤立を深める学生生活の困難さが描き出されている。

これまでにはコロナ禍における学生生活に関する調査・研究も多く取り組まれてきた。

文部科学省が 2021 年 3 月に全国の大学生を対象とした調査(新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査)では, 学生生活上の悩みの有無を設問し, 「授業等に関すること」(悩みを抱える学生 37.9%), 「将来のキャリアに関すること」(同 73.3%), 「経済的な状

況に関すること」(同 40.7%), 「学内の友人関係に関すること」(同 29.1%) という結果を示したうえで「学生生活における悩みとしては, 将来のキャリアに関する悩みが最も多い。」と指摘している(表 2)。これらの悩みがコロナ禍によって深刻化したものかどうかはわからない。しかし, 悩みを抱える学生が多くいる現状は窺い知ることができる。

コロナ禍以前から継続的に実施されていて学生生活への影響を推し量ることが可能な調査としては, 全国大学生生活協同組合連合会による「学生生活実態調査」がある。「学生生活は充実しているか」という設問に対する回答での「充実している」と「まあ充実している」を合わせた比率をみると, コロナ前の 2019 年が 88.8%, コロナ禍の初年にあたる 2020 年が 74.2%, そして, 2021 年が 78.6%と推移している。学生生活に対する学生自身の主観的な評価はコロナ禍によって悪化している(表 3)。

また, これまでに取り組まれた調査では, コロナ禍のなかで実施された調査では悲観的な側面ばかりでなく, 肯定的な側面があることも注目され

表 2 学生生活上の悩みの有無(文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」)

	授業等に関すること	将来のキャリアに関すること	経済的な状況に関すること	学内の友人関係に関すること
悩みを抱える学生の比率	37.9	73.3	40.7	29.1

出所) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査(結果)」(2021)より作成

表 3 大学生生活充実度(全国大学生生活協同組合連合会「第 57 回学生生活実態調査」)

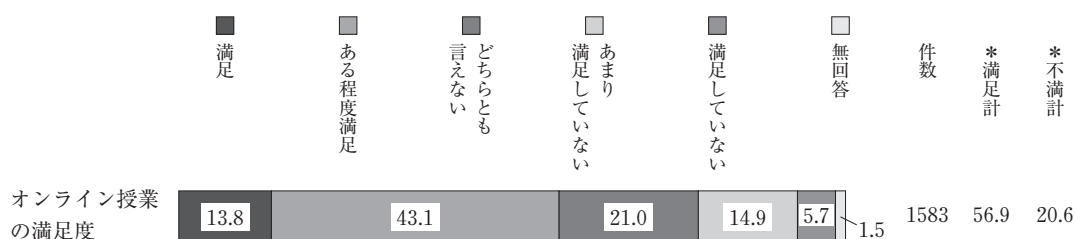
	2018	2019	2020	2021
総計	88.0	88.8	74.2	78.6
1 年	89.4	89.4	56.5	80.6
2 年	87.2	88.0	77.1	70.8
3 年	86.6	87.7	81.5	78.9
4 年以上	88.6	90.1	86.4	84.5

注) 「充実している」+「まあ充実している」の比率。

出所) 全国大学生生活協同組合連合会「第 57 回(2021 年秋実施)学生生活実態調査 速報」(2022)より作成



図1 オンライン授業の満足度（文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」）



出所) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」(2021)より作成

ている。

先に取り上げている文部科学省による調査ではオンライン授業への評価をたずねているが、「全体的な満足度としては、不満に感じる割合より満足に感じる割合の方が多い。」こと、そして、オンライン授業の良かった点として、「自分の選んだ場所で授業を受けられることや、自分のペースで学修できること」が取り上げられている（図1）。

同様にオンライン授業への評価を調査した杉浦、小野、米田の研究では自由記述への回答をもとに「オンライン授業により対面授業で感じていた困難が緩和された、という声もあった。」（杉浦・小野・米田 2021：19）ことを指摘している。

肯定的な側面はオンライン授業に対するものにとどまらない。鎌田による研究でも自由記述を対象にした分析にもとづいて「半数以上が思うように遊びやイベントに行けなかった、友達に会えなかったことをストレスと感じて」いるものの、「回答者の46.5%がコロナ禍の経験から得られたポジティブな側面を自由記述で報告した。」（鎌田 2021：67）ことに注目している。ポジティブな側面としては「料理、趣味、勉強、のようなこれまでやりたいと思っていたながらも手が出なかったことにチャレンジできたこと」、「通学や就職活動等にかかる時間や交通費をはじめとする費用が節約できたこと」、「オンライン授業等を通じてITスキルが向上したこと」、「家族と過ごす時間が増え

て交流が増したことや、友人と会う機会が減ったことで友人の大切さに気づかされた」ことなどがあげられている。ポジティブな側面はオンライン授業によるものばかりでなく、生活の諸領域にみられる可能性を示唆している。

また、橋本も静岡県内の大学生を対象に心理社会的なストレスに関する調査に取り組んでいるが、「本研究の限界と課題」において「コロナ禍においてもポジティブな側面がありうるにも関わらず、それを扱っていないのも、本研究の重要な限界のひとつである。本論文の冒頭で、コロナ禍が大学や大学生活に及ぼしうるさまざまな悪影響を列挙したが、その多くはマスメディアやソーシャルメディアにおける言説や議論に由来する。そして、コロナ禍でもコロナ禍以前と変わらず、ジャーナリズムやインターネットはネガティブ情報を過度に偏重しやすく、それが自己成就的に状況を悪化させるような側面もある」（橋本 2021：31-32）と述べている。調査などにより実証されているわけではないが、コロナ禍によるネガティブな側面が実態以上に強調されてしまっている可能性を示唆している。

コロナ禍が学生生活に深刻な影響をもたらしたことは間違いないだろう。しかし、これまでに取り組まれた調査からは、コロナ禍は学生生活にポジティブ、ネガティブ両面の影響があったという複眼的な視点からの検討が求められていることが示されている。

#### 4. 本稿で取り上げる調査

本稿では筆者が担当する社会学演習において2021年度に実施した調査のうち、GoogleFormsを用いたWebアンケート（「コロナ禍における学生生活に関するアンケート」2021年10月実施）によって集めたデータを分析の対象にする。アンケートは32の設問で構成されているが、分析にあたっては人間関係の変化（Q11～18）と評価（Q20～22）に関する設問を取り上げた。アンケートは受講生と担当教員である筆者が共同で設問を作り上げているが、受講生の間では、当初から学生生活の現状について、ネガティブな側面ばかりでなく、ポジティブな側面があることが実感レベルで共有されていた。それゆえ、先行している調査・研究が今後の研究課題として指摘している両面性を意識した設問となっている。

Webアンケートは受講生が友人・知人によつて協力依頼し238件の有効回答を得ている。検討上の留意点としては、人づてでアンケートへの協力を求めている点である。コロナ禍では学生の孤独が課題として指摘されてきた。しかし、人づてでの依頼の可能な回答者というのはコロナ禍のなかでも他者とのつながりを維持している人である。それゆえ、学生全体を母数とすると相対的に豊かな人間関係をもっている層が対象となっている可能性がある。ただ、そもそも調査はつなが

りなしには成り立たないものであり、現実的には学生全体を母数とした調査というのは実現不可能なものである。それゆえ、調査対象にバイアスがあったとしても、限界のなかで取り組んだ調査といえるだろう。

##### （1）調査実施時（2021年10月）の状況

2020年からの2年あまりの間、その時期により感染者数は増減し、また、感染防止のための対策も変化している。アンケートの結果は調査の実施時期により変動が生じる可能性がある。

調査を実施した2021年10月は、感染の第5波が収束し、国による4回目の緊急事態宣言（2021年7月12日～9月30日）が解除された時期にあたる。

大学でのオンライン授業の実施状況については、文部科学省が「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等について」（2021年11月19日）を公表している。これによると「7割以上を対面授業とする予定とした大学等は964校と、全体の約83.2%にのぼる。」とある。このうち「全面対面」について前後の期間も含めて比率の推移をみると、2020年度後期が19.3%、2021年度前期が36.4%、2021年度後期が36.2%、2022年度前期が55.5%となっている。本稿が分析対象とする調査が実施された時期である2021年度後期は、2020年度に比べれば対面の授業が

表4 大学等における授業の実施方針（文部科学省「大学等における授業の実施方針等について」）

(%)

	全面対面	ほとんど対面	7割が対面	半々	3割が対面	ほとんど遠隔	件数
令和4年度（2022年度）前期における実施方針	55.5	32.3	8.1	3.5	0.3	0.3	1,165
令和3年度（2021年度）後期における実施方針	36.2	28.7	18.4	14.3	2.2	0.3	1,158
令和3年度（2021年度）前期における実施方針	36.4	28.9	17.7	14.5	2.3	0.3	1,064
令和2年度（2020年度）後期における実施方針	19.3	—	—	—	—	—	1,064

出所）文部科学省「大学等における授業の実施方針等について」より作成

表5 1週間の登校日数（全国大学生生活協同組合連合会「第57回学生生活実態調査」）

	(日)		
	2019	2020	2021
総計	4.4	2.0	2.8
1年	5.0	2.0	3.2
2年	4.7	1.8	2.9
3年	4.2	2.0	2.6
4年以上	3.5	2.2	2.4

出所) 全国大学生生活協同組合連合会「第57回(2021年秋実施)学生生活実態調査 速報」(2022)より作成

増え、ほとんどの大学が“授業の多数を対面で実施する予定”と回答している時期にあたる(表4)。

ただ、学生を対象とした全国大学生生活協同組合連合会の調査により1週間の平均登校日数の推移をみると、2019年4.4日、2020年2.0日、2021年2.8日となっている。2021年の時点では依然としてコロナ前の平均登校日数には戻っていない(表5)。

また、1週間の授業形態をみると、「対面授業とオンライン授業がありオンライン授業が多い」、「すべてオンライン授業で行われている」を合わせた比率は、2020年が72.8%、2021年が47.3%となっている(表6)。2021年においても学生の割合でみると、半数がオンライン授業中心の学生生活を過ごしていたことになる。

表6 「オンライン授業が多い」の比率（全国大学生生活協同組合連合会「第57回学生生活実態調査」）

	(%)	
	2020	2021
総計	72.8	47.3
1年	82.0	50.5
2年	79.5	54.1
3年	73.8	53.0
4年以上	51.5	32.1

注) 「対面授業とオンライン授業がありオンライン授業が多い」+「すべてオンライン授業で行われている」の比率。4年生以上は「すでに単位取得済み」が2020年に12.8%、2021年に28.3%ある。

出所) 全国大学生生活協同組合連合会「第57回(2021年秋実施)学生生活実態調査 速報」(2022)より作成

## (2) 調査回答者の構成

本稿で分析対象とする調査について、検討に先立って調査回答者の構成を確認しておきたい。性別は女性(160人、67.2%)、住居は「家族・親族と住んでいる」(172人、72.3%)が多数である(表7)。

学年は、1年生が35人(14.7%)、2年生が32人(13.4%)、3年生が99人(41.6%)、4年生が72人(30.3%)である。3・4年生が回答者の7割を占めるが、調査を呼びかけた受講生が3・4年生であること、また、1年生、2年生はコロナ禍で学生生活をスタートした学年であるために、依頼をした3年生、4年生との接点が少ないことも影響していると考えられる。

表7 回答者の構成(性別、居住形態、学年)

Q 1 性別					Q 2 居住形態						Q 3 学年					
	件数	男性	女性	どちらでもない	無回答	1人で住んでいる	家族・親族と住んでいる	寮	シェアハウス	その他	無回答	1年生	2年生	3年生	4年生以上	無回答
件数	238	75	160	2	1	38	172	26	1	0	1	35	32	99	72	0
比率	100.0	31.5	67.2	0.8	0.4	16.0	72.3	10.9	0.4	...	0.4	14.7	13.4	41.6	30.3	...

出所) 「コロナ禍における学生生活に関するアンケート」より作成。以下の図表も同様



表 8 回答者の構成（在学している学校）

Q 5 在学している学校

	件数	大学	うち中央大学 に在学	短期大学	大学院	専門学校	無回答
件数	238	229	152	4	2	2	1
比率	100.0	96.2	63.9	1.7	0.8	0.8	0.4

表 9 回答者の構成（部活・サークル、アルバイト）

Q 5 部活・サークルへの所属 Q 6 定期的に從事しているアルバイト（複数回答）

	件数	所属している	いたけどやめた	コロナ前は所属して いたけどやめた	もともと 所属していない	無回答	業種					*アルバイトあり計	やめた	コロナ前はしていたが やめた	元々定期的な アルバイトはしてない	無回答
							飲食	販売	教育	サービス・エンタメ	その他業種					
件数	238	191	18	29	0		90	47	42	24	17	184	17	36	1	
比率	100.0	80.3	7.6	12.2	...		37.8	19.7	17.6	10.1	7.1	77.3	7.1	15.1	0.4	

在学している学校は「大学」（229 人，96.2％）が多数で，そのうち，152 人（63.9％）は中央大学の学生である（表 8）。

また，調査では回答者の構成として，部活・サークルへの所属状況，定期的に從事しているアルバイトの有無をたずねている。このうち，部活・サークルは所属している人が 191 人（80.3％），アルバイトをしている人が 184 人（77.3％）である（表 9）。先にとりあげた全国大学生活協同組合連合会の調査では，サークルに所属している人の割合は 55.9％，アルバイト就労率（過去半年）は 77.6％となっている。本調査の回答者は，世間一般と比べると，部活・サークルに所属している人の割合がやや高いことになる。

## 5. 調査結果

アンケートは属性以外に Q11 から Q 32 の 22 の設問を設けている。本節ではコロナ禍における「生活と人間関係の変化」，「人間関係への評価」の 2 つの領域を対象に結果を検討していく。

### (1) コロナ禍における生活と人間関係の変化

コロナ禍のなかでの生活を実像の一端を明らかにするために，日常的な活動のなかから [授業・ゼミ]，[部活・サークル]，[アルバイト] を取り上げ，それぞれ 1 週間における対面，オンラインでの参加・実施の頻度をたずねた。

それぞれでの最も多い区分をみると，[授業・ゼミ] の受講状況では対面が「週 1 日程度」（31.5％），オンラインが「週 4 日程度」（20.6％）である。調査回答時における [授業・ゼミ] の受講形態は依然としてオンライン中心となっている（表 10）。

[部活・サークル] は，「コロナ前は所属していたけどやめた」（7.6％），「もともと所属していない」（12.2％）といった所属していない人（19.7％）を含んだ比率である。表のなかの対面における「ほとんどない・該当しない」（56.3％）にはこの所属していない人が含まれることになるが，この所属していない人を差し引いても「ほとんどない・該当しない」は 36.6％である。部活・サークルに所属している人が全体の 80.3％であったこ

とを踏まえると、所属している人の半数近くは週に一度も対面での活動に参加していないことになる。また、[授業・ゼミ]では対面の代替としてオンラインの活用が進んでいたが、[部活・サークル]の活動での週1日以上オンラインでの参加は22.7%と限定的である。コロナ禍のなかでは、部活・サークルに所属していたとしても、実質的には活動が停止していた団体も少なくなかったと考えられる。

[アルバイト]についても「コロナ前はしていたがやめた」(7.1%)、「元々定期的なアルバイトはしてない」(15.1%)などアルバイトをしていない人(22.3%)を含む比率であることに留意が必要だが、対面での実施の頻度は「週3日程度」が31.1%と最も多く、週1日以上対面がある人は71.8%で、これはアルバイトをしている人(77.3%)にかなり近い比率である。コロナ禍のなかでは労働の場でテレワークの活用が進んだ。しかし、学生が就いているアルバイトは販売、飲食といった職場への出勤が不可欠な業種がほとん

どであるために、アルバイトでオンラインがあったケースは、週1日以上をすべてあわせても3.4%と限定的である。

これらの3つの生活領域での諸活動への参加の状況をまとめると、コロナ禍のなかで学生は、授業はオンライン中心に受講するものの、部活・サークルは実質的に活動が停止しているケースが一定数を占めていた。他方、対面での参加が続いたのがアルバイトである。3. コロナ禍のなかでの学生生活のなかで取り上げているが、新聞の報道等では学生アルバイトの休業、解雇にともなう生活の困窮が取り上げられてきた。しかし、ここでの調査結果に表れているように、多数が対面での活動を継続していたことも注目すべき点である。学生の日常は、大学の授業では感染防止のためにオンライン授業の実施が徹底され、他方、アルバイトの場では感染リスクを抱える対面の必要な職種で働いている。感染に対する相反する取扱いを日常生活のなかで受け入れていた特異な層であったといえる。

表10 コロナ禍のなかでの諸活動への参加 対面とオンライン

		対面での参加・実施の頻度									オンラインでの参加・実施の頻度									件数
		週5日以上	週4日程度	週3日程度	週2日程度	週1日程度	*対面あり計	該当しない	ほとんどない	無回答	週5日以上	週4日程度	週3日程度	週2日程度	週1日程度	*オンラインあり計	該当しない	ほとんどない	無回答	
授業・ゼミ		6.7	8.4	8.8	19.7	<b>31.5</b>	75.2	23.1	1.7		16.0	<b>20.6</b>	15.5	14.7	11.3	78.2	21.0	0.8		238
学年別	1・2年生	10.4	11.9	14.9	20.9	26.9	85.1	11.9	3.0		35.8	34.3	13.4	6.0	3.0	92.5	4.5	3.0		67
	3年生	5.1	11.1	9.1	25.3	31.3	81.8	18.2	...		14.1	25.3	23.2	19.2	7.1	88.9	11.1	...		99
	4年生	5.6	1.4	2.8	11.1	36.1	56.9	40.3	2.8		...	1.4	6.9	16.7	25.0	50.0	50.0	...		72
部活・サークル		13.9	4.2	4.6	6.3	10.1	39.1	<b>56.3</b>	4.6		4.2	2.9	5.9	2.9	6.7	22.7	<b>73.1</b>	4.2		238
学年別	1・2年生	26.9	1.5	10.4	6.0	10.4	55.2	40.3	4.5		4.5	9.0	9.0	3.0	7.5	32.8	61.2	6.0		67
	3年生	6.1	6.1	2.0	9.1	13.1	36.4	58.6	5.1		4.0	...	5.1	4.0	9.1	22.2	72.7	5.1		99
	4年生	12.5	4.2	2.8	2.8	5.6	27.8	68.1	4.2		4.2	1.4	4.2	1.4	2.8	13.9	84.7	1.4		72
アルバイト		1.7	8.0	<b>31.1</b>	21.4	9.7	71.8	24.8	3.4		...	0.4	1.3	0.8	0.8	3.4	<b>89.1</b>	7.6		238
学年別	1・2年生	3.0	3.0	25.4	17.9	10.4	59.7	32.8	7.5		...	...	1.5	...	...	1.5	88.1	10.4		67
	3年生	1.0	8.1	38.4	23.2	10.1	80.8	17.2	2.0		...	1.0	1.0	1.0	1.0	4.0	87.9	8.1		99
	4年生	1.4	12.5	26.4	22.2	8.3	70.8	27.8	1.4		...	...	1.4	1.4	1.4	4.2	91.7	4.2		72

このように学生の日常生活には、コロナ前と比べると変わった領域（大学での生活）と変化が少なかった領域（アルバイト）とが並存している。生活の変化は人間関係の変化にも結びつく。コロナ禍における人間関係はどのように変化しているのだろうか。親密な関係の人、あいさつ程度の関係の人、それぞれでの関係の変化には以下のような特徴がみられた。

### ① 親密な関係の人との関係

コロナ禍では、極力、非接触の生活が求められてきた。そのようななかでの親密な関係の人（調査票では「遊びに行ったり、食事に行ったりする関係」の人と記載）と対面で会う機会の増減について「増えた」、「変わらない」をあわせたコロナ前以上の比率をみると、[授業・クラス・ゼミの知り合い]が16.8%、[サークルや部活の知り合い]が21.4%、[アルバイトでの知り合い]が36.1%、[大学入学前からの知り合い]が33.6%である。いずれの領域でも「増えた」+「変わらない」の比率は半数を下回っていることから、幅広い領域において対面で会うことの取りやめが広がっていたといえる。ただし、「増えた」+「変わらない」の比率には段差があり、大学が関連する

[授業・クラス・ゼミの知り合い]、[サークルや部活の知り合い]は、大学外の[アルバイトでの知り合い]、[大学入学前からの知り合い]と比べて一段と比率が低い。対面で会う機会の縮小は、大学での人間関係でより一層進んでいたことが読み取れる（図2）。

生活の諸領域において対面で会う機会が縮小しても、親密な関係の人との関係であれば、オンラインを活用したコミュニケーションにより維持していくことも可能であると考えられる。それぞれの生活領域について、オンラインのコミュニケーションが「増えた」+「変わらない」というコロナ前以上に活用している人の比率をみると、どの生活領域においても「増えた」+「変わらない」が多数を占めている。「減った」も1割程度みられるものの、オンラインのコミュニケーションの活用によって関係の維持を図ろうとしていたといえる（図3）。

しかし、オンラインの活用によって親密な人間関係は維持できたのだろうか。同じく、親密な人との関係についてコロナ前と比べた人間関係の深さの変化をたずねると、「深まった」+「変わらない」というコロナ前以上の関係が維持できるのは、[授業・クラス・ゼミの知り合い]が39.9%、

図2 遊んだり食事に行く関係の人と対面で会う機会の増減

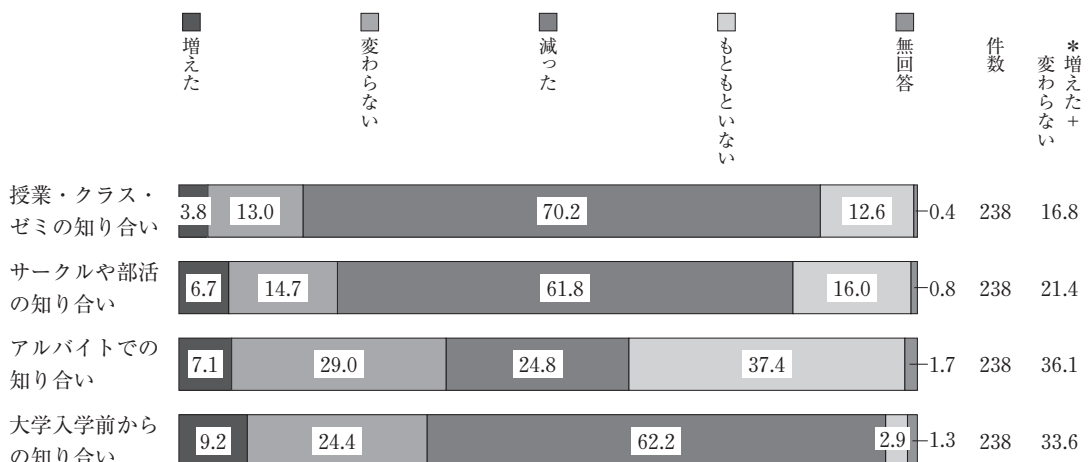


図3 遊んだり食事に行く関係の人とのオンラインのコミュニケーションの増減

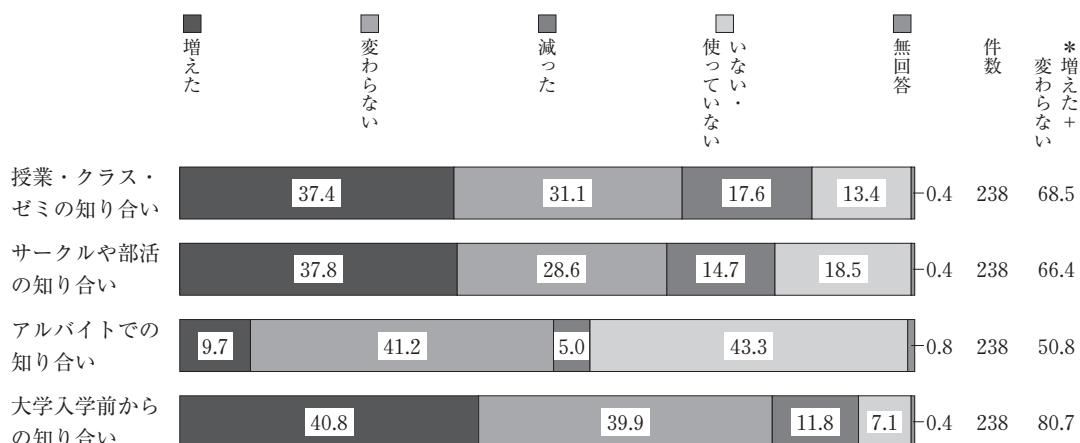
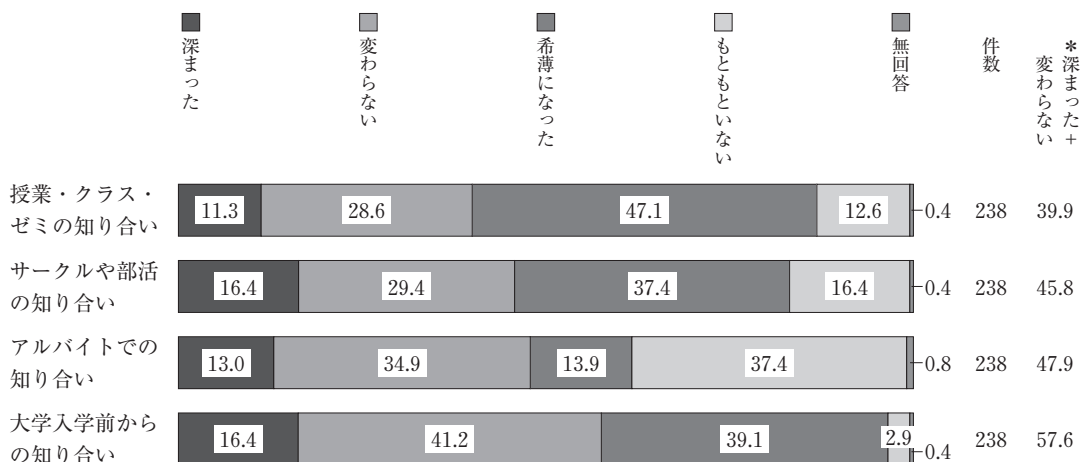


図4 遊んだり食事に行く関係の人とのつきあいの深さの変化



「サークルや部活の知り合い」が45.8%、「アルバイトでの知り合い」が47.9%、「大学入学前からの知り合い」が57.6%である。ただ、「アルバイトでの知り合い」については「もともとない」が37.4%ある。このことも考慮すると、大学外での生活領域である「アルバイトでの知り合い」、「大学入学前からの知り合い」のほうが、従来の関係を維持できていたといえる（図4）。

## ② あいさつ程度の関係の人の増減

人間関係には親密な関係ばかりでなく、つながりは希薄であっても拡がりのある関係もある。このような関係は、将来の人間関係形成の土台になったり、拡がりは橋渡し型のソーシャル・キャピタルとして機能する潜在的な可能性を有している。ただ、つながりが希薄であるために、土井がいうところの「高度で繊細な気くばりを伴った人間関係」、満野がいうところの「気遣い」が求められる関係に相当するものともいえる。

調査票では希薄であっても拡がりのある関係について「あいさつ程度の関係」と表現して、コロナ前と比べた増減をたずねている。「増えた・できた」と「変わらない」をあわせたコロナ前以上の比率をみると、[授業・クラス・ゼミの知り合い]が48.7%，[サークルや部活の知り合い]が52.9%，[アルバイトでの知り合い]が64.7%，[大学入学前からの知り合い]が66.8%である。大学における対面でのコミュニケーションの機会が限定的であったなかで、[授業・クラス・ゼミの知り合い]、[サークルや部活の知り合い]ともあいさつ程度関係を維持できていたのは半数にとどまる。[授業・クラス・ゼミの知り合い]については「減った」が45.0%を占めている。他方、大学外の[アルバイトでの知り合い]、[大学入学前からの知り合い]で関係を維持できていたのは6割台で大学での関係に比べると多い（図5）。

### ③ クラスやゼミの人間関係の後退

コロナ禍での人間関係の変化をみると、大学での対面でのコミュニケーションの機会が減少するなかで、人間関係の場としては、相対的に[アル

バイトでの知り合い]、[大学入学前からの知り合い]といった大学外での人間関係の存在感が高まっている。このような変化は親密な関係、あいさつ程度の関係の両方に共通してみられる。

このような変化は重視する人間関係における変化としても表れている。これまでに取り上げてきた[授業・クラス・ゼミの知り合い]、[サークルや部活の知り合い]、[アルバイトでの知り合い]、[大学入学前からの知り合い]のうち、どの領域を重視しているのか、コロナ前、現在のそれぞれについて2つまであげてもらっている。

コロナ前、現在で共通して重視されているのが[大学入学前からの知り合い]と[サークルや部活の知り合い]である。いずれも、コロナ前、現在ともに6割が重視している。前者は土井がいうところの「生得的な属性」に該当するものであり、「地元のつながりがそのまま保たれる傾向」という土井の見立てとも合致する結果である（図6）。

これら以外の人間関係では、[クラスやゼミの知り合い]はコロナ前には5割が重視していたが、現在になると4割に低下している。クラスやゼミでの知り合いは、たいていは偶然の結果とし

図5 あいさつ程度の関係の増減

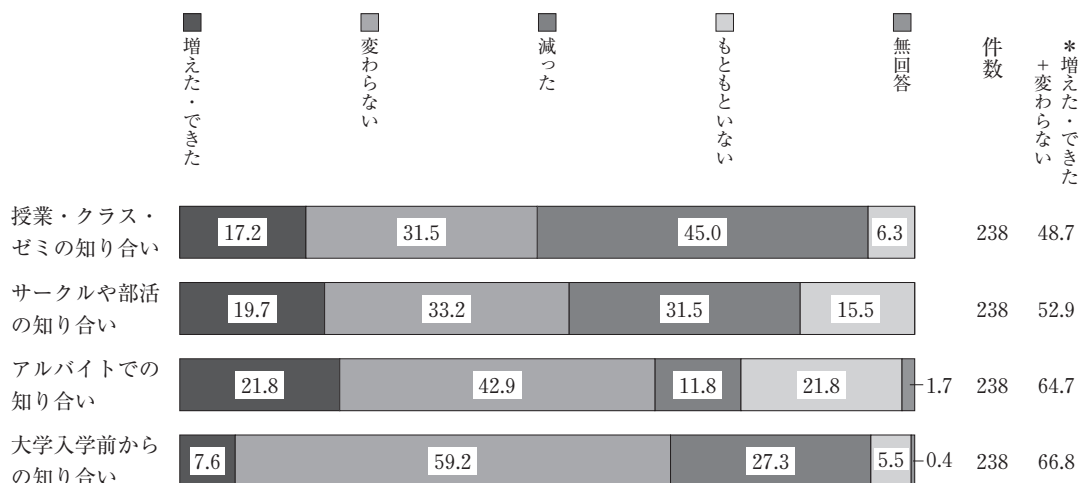
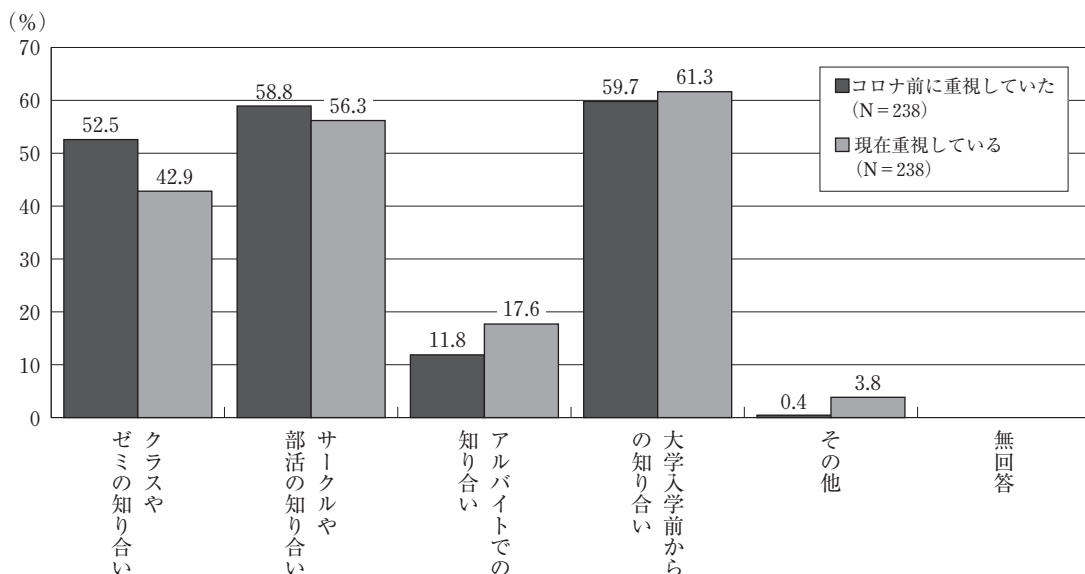




図6 家族・親族以外で重視している人間関係（2つ以内選択）



て、同じクラス、ゼミに所属した他者との人間関係である。どちらかといえば満野がいうところの「表面的な付き合い」からスタートする人間関係に該当する。

他方、コロナ前に比べて重視度合いが増えているのが「アルバイトでの知り合い」である。コロナ前には1割であったものが、現在では2割が重視している。

大学における対面のコミュニケーションの機会が減少するなかにあっても、「サークルや部活の知り合い」の重視度にはほとんど変化がみられない。しかし、「クラスやゼミの知り合い」の重視度合いは低下している。全体としてみれば、コロナ禍のなかでは人間関係における大学の位置づけは後退したといえる。

## (2) 人間関係への評価

学生を取り巻く人間関係は全体的にみると、大学での人間関係は相対的に希薄化が進み、また、拡がりも縮小している。大学外での「アルバイトでの知り合い」、「大学入学前からの知り合い」と

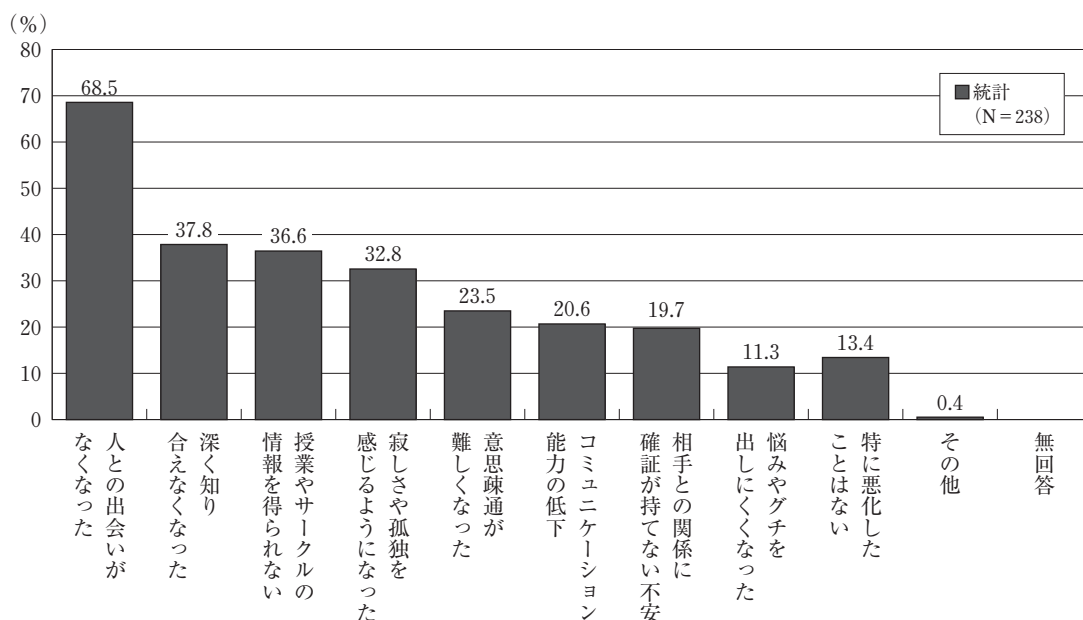
の関係は、相対的にみれば維持されているが、希薄化、縮小した人も一定数みられる。コロナ禍は学生の人間関係のあり様を変化させることとなった。

このような人間関係の変化を学生自身はどのように評価しているのだろうか。人間関係との関連で悪化したこと（複数選択）、良くなったこと（複数選択）について回答を求めている。

### ① 人間関係との関連で悪化したこと

悪化したこととしては、「人との出会いがなくなった」（68.5％）を7割近くが実感しており、新たな人間関係形成の機会の喪失を多数が否定的に捉えている。用意した選択肢のなかで2つ目に比率が高かったものは「深く知り合えなくなった」（37.8％）である。大学での人間関係を中心に、あいさつ程度の希薄であっても拡がりのある関係が減少し、同時に、遊んだり食事に行く親密な関係の希薄化も進んでいる。拡がりの縮小と関係の希薄化の両面が進んでいるが、両者を比べると拡がりが縮小したこと（人との出会いがなくな

図7 コロナ禍のなかで人間関係との関連で悪化したこと（複数選択）



った)のほうが悪化要素として幅広く意識されている(図7)。

また、「特に悪化したことはない」(13.4%)は1割である。9割近くが人間関係のなかで何らかの悪化した要素をあげていることになる。

## ② 人間関係との関連で良くなったこと

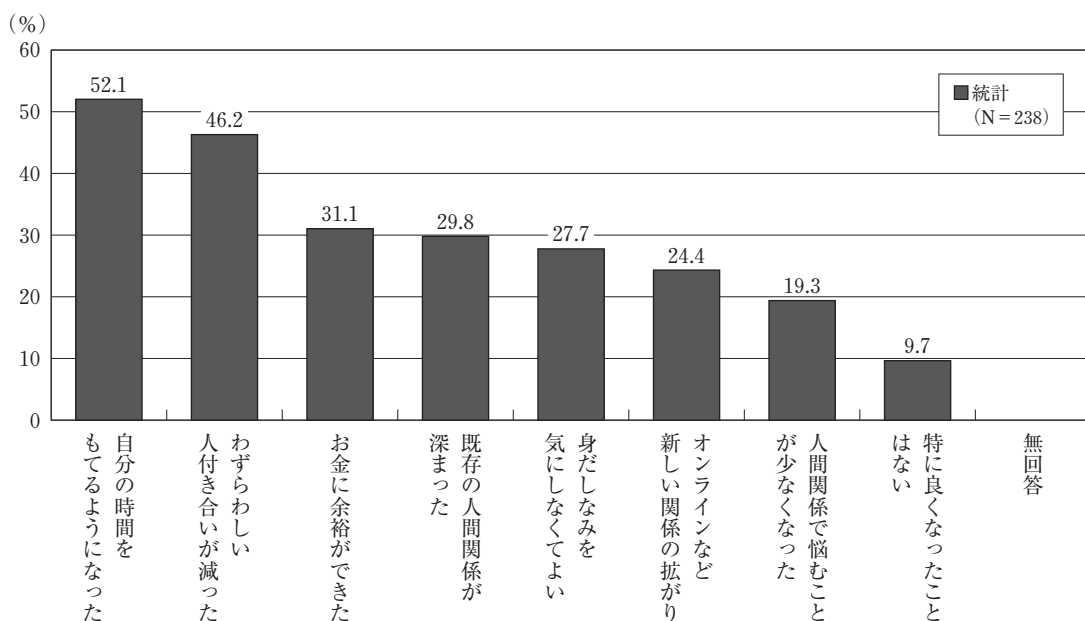
「特に悪化したことはない」が13.4%であったことから、これだけみれば多数の学生がコロナ禍のなかで人間関係における悪化した要素を実感していることになる。しかし、良くなったことをみても「特に良くなったことはない」が9.7%である。回答者の9割が悪化したことをあげ、同様に9割が良くなったことをあげている。対面によるコミュニケーションが制約されていたなかで、多数が悪くなったことと良くなったことの両面を実感している。人間関係へのコロナ禍による影響は一面的に捉えることができない事象である(図8)。

良くなったこととしてあげられているものをみ

ると、「自分の時間をもてるようになった」(52.1%)、「わずらわしい人付き合いが減った」(46.2%)をいずれも半数前後があげている。コロナ禍のなかで人とのつきあいに費やす時間が減少したことは、一人の時間の使い方を豊かなものとする契機になっている。また、「わずらわしい人付き合いが減った」も良くなったこととして目立つが、これは土井がいうところの「高度で繊細な気くばりを伴った人間関係」からの「解放」を意味しているといえる。

なお、良くなったことを選択肢としては人間関係の豊富化といえる「既存の人間関係が深まった」(29.8%)、「オンラインなどの新しい関係の拡がり」(24.4%)も用意していたが、これらはいずれも2～3割と多くない。良くなったことを全体的にみると、人間関係の縮小を肯定的に捉える見方が優勢となっている。

図8 コロナ禍のなかで人間関係との関連で良くなったこと（複数選択）



### ③ 人間関係についての全体的な評価とその要因

コロナ禍における人間関係の変化に対する評価には両面性がある。両面性はあるものの、あえてコロナの感染拡大前と比べた全体的な人間関係の満足度の変化を「上がった」、「どちらとも言えない」「下がった」のなかから1つを選んでもらうと、「上がった」が12.6%、「どちらとも言えない」が51.7%、「下がった」が35.7%となっている。「下がった」は「上がった」に比べれば多い。その点だけみれば、コロナ禍のなかで人間関係への満足度は低下傾向にあるといえる。しかし、コロナ禍では、対面によるコミュニケーションへの制約があったにもかかわらず、「下がった」は4割弱に過ぎず、むしろ「上がった」も1割もあるとみることもできる。これは学年別にみても同様である（図9）。

前節で取り上げているように、コロナ禍では人間関係のなかで良くなったことも、悪くなったこ

とも、複数の要素がある。ここで取り上げた全体的にみた人間関係の満足度はどのような要素によって影響されているのだろうか。二項ロジスティクス回帰分析を用いて、全体的にみた人間関係の満足度を被説明変数、コロナ禍のなかで悪化したこと、良くなったことのそれぞれの要素を説明変数としたモデルをつくり、全体的にみた人間関係の満足度の規定要因を検討してみたい。なお、被説明変数としている全体的にみた人間関係の満足度は、「上がった」と「どちらとも言えない」というコロナ前と比べて低下ではない評価を1、「下がった」という評価を0と整理している（表11）。

はじめに悪化したことのなかでどのような要素が影響しているかをみていくと、「人との出会いがなくなった」（オッズ比 0.366）、「深く知り合えなくなった」（同 0.375）、「悩みやグチを出しにくくなった」（同 0.189）が全体的な満足度と有意な関係となっている。いずれも悪化したことを選択

図9 コロナの感染拡大前と比べた全体的にみた人間関係の満足度の変化

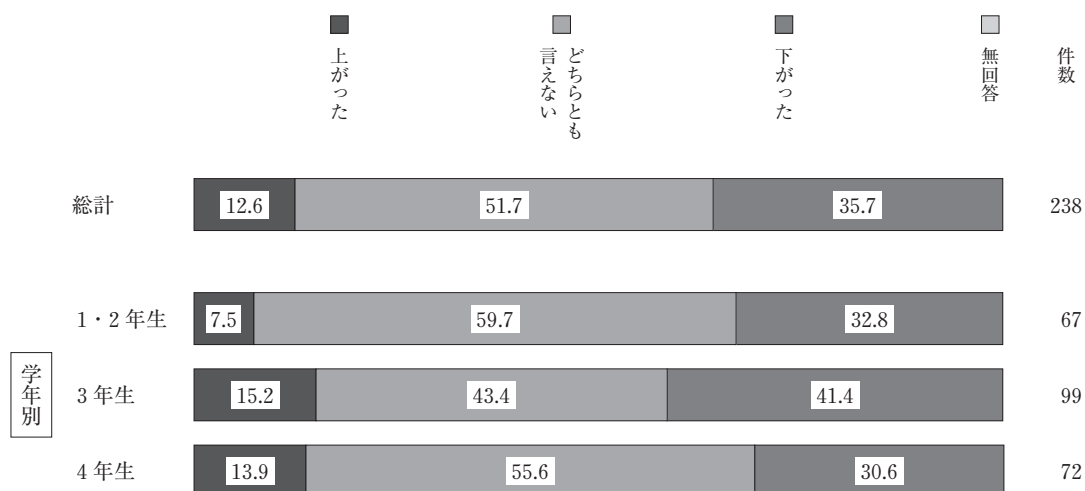


表11 全体的にみた人間関係の満足度の規定要因（二項ロジスティック回帰分析）

		被説明変数（「上がった」「どちらとも言えない」=1）		
		係数値	標準誤差	オッズ比
悪化したこと	人との出会いがなくなった	-1.005 *	0.393	0.366
	深く知り合えなくなった	-0.981 **	0.364	0.375
	コミュニケーション能力の低下	0.294	0.430	1.342
	相手との関係に確証が持てない不安	0.396	0.445	1.485
	意思疎通が難しくなった	-0.664	0.383	0.515
	寂しさや孤独を感じるようになった	-0.446	0.359	0.640
	悩みやグチを出しにくくなった	-1.668 **	0.545	0.189
	授業やサークルの情報を得られない	0.310	0.353	1.363
良くなったこと	わずらわしい人付き合いが減った	0.960 **	0.342	2.611
	人間関係で悩むことが少なくなった	0.478	0.425	1.613
	自分の時間をもてるようになった	0.076	0.317	1.079
	お金に余裕ができた	-0.179	0.353	0.837
	オンラインなど新しい関係の拡がり	0.920 *	0.398	2.510
	身だしなみを気にしなくてよい	0.124	0.355	1.132
既存の人間関係が深まった		1.122 **	0.372	3.071
定数		0.953	0.382	2.592
χ <sup>2</sup> 値		57.086		
自由度		15		
-2 対数尤度		253.150		
Cox-Snell R <sup>2</sup> 値		0.213		
N		238		

\*\* p<0.01 \* p<0.05

肢であるので、オッズ比は1以下、すなわち、満足度を低下させる方向に作用している。人間関係における拡がりの縮小と関係の希薄化の両方が満足度に対しネガティブに影響している。

良くなったことも同様にみていくと、「わずらわしい人付き合いが減った」(オッズ比 2.611)、「オンラインなど新しい関係の拡がり」(同 2.510)、「既存の人間関係が深まった」(同 3.071)がいずれも同程度に満足度を上昇させる方向に作用している。良くなったことの設問では「自分の時間をもてるようになった」が選択肢のなかで最も多くあげられていたが、これは全体的な満足度との間で有意な関係とはなっていない。関係の拡がりや深化(「オンラインなど新しい関係の拡がり」,「既存の人間関係が深まった」)とともに、関係の縮小(「わずらわしい人付き合いが減った」)が同等に満足度を上昇させる効果をもっている。

## 6. ま と め

2021年10月に実施した調査の結果をもとに、学生の生活と人間関係における変化をみてきた。本稿のなかで検討してきたことは以下の2点に整理される。

### (1) 人間関係形成の場としての大学の後退

コロナ禍のなかで大学における授業の実施形態はオンラインへシフトし、学生にとっては大学での対面のコミュニケーションは制約を受けることになった。このことは調査・研究のみならず、新聞などの報道によっても取り上げられていることである。他方、この対面でのコミュニケーションの機会への制約が少なかったのが大学入学前からの知り合い、アルバイトの知り合いなど、大学外での人間関係である。

新聞などの報道では雇用の縮小によりアルバイトをする学生も困窮していくことが社会的な課題としてクローズアップされてきた。しかし、多数

の学生はアルバイトを続けていたことも現実であり、しかも、アルバイトで従事する職種が販売、飲食などテレワークの困難な職種であるために、対面での仕事を継続することが学生の間では一般的なあり様であった。学生は、対面の制約を受ける大学と、対面を受け入れるアルバイトという、感染対策における真逆の取扱いを日常生活のなかで受け入れていた。

このような生活のなかで、大学は人間関係形成の場から後退していった。大学入学前からの知り合いの相対的な位置づけが高まる動きはコロナ禍で新たにはじまったこととはいえない。土井が指摘しているように、現代の若者は、生得的な属性(地元のつながり)への思い入れが強く、さらに、SNSなどのオンラインのコミュニケーションへの依存が高まるなかで、さらに地元のつながりが優位となる状況が強化されたとみるべきだろう。

他方、人間関係が最も狭く、薄くなったのが、大学における授業・クラス・ゼミを通じた知り合いである。授業・クラス・ゼミでの知り合いは、本人の意図というよりも、偶然に同じ空間をともにすることになった人間関係である。生得的な属性のつながりとは対極的なもので、当事者である学生にとっては、高度で繊細な気くばりを求められる人間関係の場の一つであったと考えられる。

### (2) 人間関係への評価の二面性

コロナ禍における人間関係への評価では、多数が悪化したこととともに良くなったことをあげている。悪化したこととしては、人間関係における拡がりの縮小と関係の希薄化の両方が満足度にネガティブに影響している。他方、良くなったこととしては、人間関係における拡がりの拡大と関係の深化のみならず、わずらわしい人付き合いの減少が満足度にポジティブに影響している。人間関係における拡がりの縮小と関係の希薄化は学生生活に閉塞をもたらす同意に、わずらわしい関係からの“解放”をもたらしたといえる。



わずらわしい関係からの“解放”は学生生活に心地よさをもたらす。しかし、このような生活は「意外性に満ちた体験や異質な人間と出会う経験」（土井 2008：225）からさらに離れていく動きに他ならない。コロナ禍における人間関係に対する評価において、ネガティブな評価が少ないこと自体は肯定的に捉えるべきかもしれないが、その評価の背景には現代社会を生きる若者が抱える根深い課題がある。

## 7. おわりに

本稿で分析に用いたアンケートはサンプル数が限定的であり、また、人づてに集めているために、サンプルとしてはバイアスがある可能性もある。しかし、本稿が示している人間関係形成の場としての大学の後退、人間関係への評価の二面性といった考察は、これまで若者の人間関係を対象とした研究により得られた知見の延長線上に位置づくものである。コロナ禍は学生の人間関係の領域においても、これまで進んできた動きをさらに加速させる触媒となったといえるだろう。

調査を実施した 2021 年 10 月から 1 年近くが経過したいま、大学の授業形態は対面の形態に戻り、キャンパスにも学生が語らう風景が戻ってきた。本稿で取り上げた学生生活の実像はコロナ禍における一過性のものとなるのだろうか。これからのアフターコロナの時代、学生生活や人間関係は対面授業の拡大とともに以前の状態に戻っていくのだろうか。現時点ではまったく予想がつかない。

コロナ禍はオンラインによるコミュニケーションの有効性を世界に知らしめている。ただし、オンラインによるコミュニケーションの限界については未だに実証されていない。目標とするミッションを達成するためには、オンラインによるコミュニケーションでも可能なのか、それとも、対面でのコミュニケーションが有効なのか。社会のさまざまな場で試行錯誤が繰り返されている。ま

た、同じ場の参加者であっても、立場によって、対面であるべきか、オンラインでも代替が可能であるのか、見方には差が生じる。私たちはオンラインによる代替可能性を判断するための基準のないアノミーのなかを生きている。現実社会でのオンラインによるコミュニケーションの活用は、ますます進んでいくだろう。大学教育では対面によるコミュニケーションが生み出しうる価値を実感、共有できるような教育実践の積み重ねがこれまで以上に求められることになるだろう。

## 参考文献

- 石川悦子 2022「コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス」『こども教育宝仙大学紀要』13：13-20.
- 石田光規 2018「人間関係の変容と孤立」佐藤嘉倫編著『ソーシャル・キャピタルと社会—社会学における研究のフロンティア—』ミネルヴァ書房、60-84.
- 鎌田晶子 2021「2020 年上半期におけるコロナ禍の学生生活とストレスに関する調査報告」文教大学生活科学研究所『生活科学研究』44：67-71.
- 杉浦郁子・小野奈々・米田幸弘 2021「コロナ禍におけるオンライン学習と学生生活：和光大生を対象にした調査結果の分析」『和光大学現代人間学部紀要』14：5-26.
- 土井隆義 2008『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書.
- 橋本剛 2021「コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討：社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて」静岡大学人文社会科学部『人文論集』71：15-34.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子 2006「対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して」日本社会心理学会『社会心理学研究』22(1)：72-84.
- 満野史子 2015『大学生の友人関係における気遣いの研究—向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響—』風間書房.

### 参考資料

- 全国大学生生活協同組合連合会 2022「CAMPUS LIFE DATA 2021 第57回 学生の消費生活に関する実態調査報告書」.
- 全国大学生生活協同組合連合会 2022「第57回（2021年秋実施）学生生活実態調査 速報」（2022年9月30日取得, [https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf\\_report57\\_pre.pdf](https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57_pre.pdf)）.
- 中央大学文学部人文社会学科小熊ゼミ 2022「2021年度報告書 コロナ禍における人間関係の変化と要因—大学生へのアンケート調査から—」.
- 文部科学省 2021「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等について」（2022年9月30日取得, [https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)）.
- 文部科学省 2021「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」（2022年9月30日取得, [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)）.